



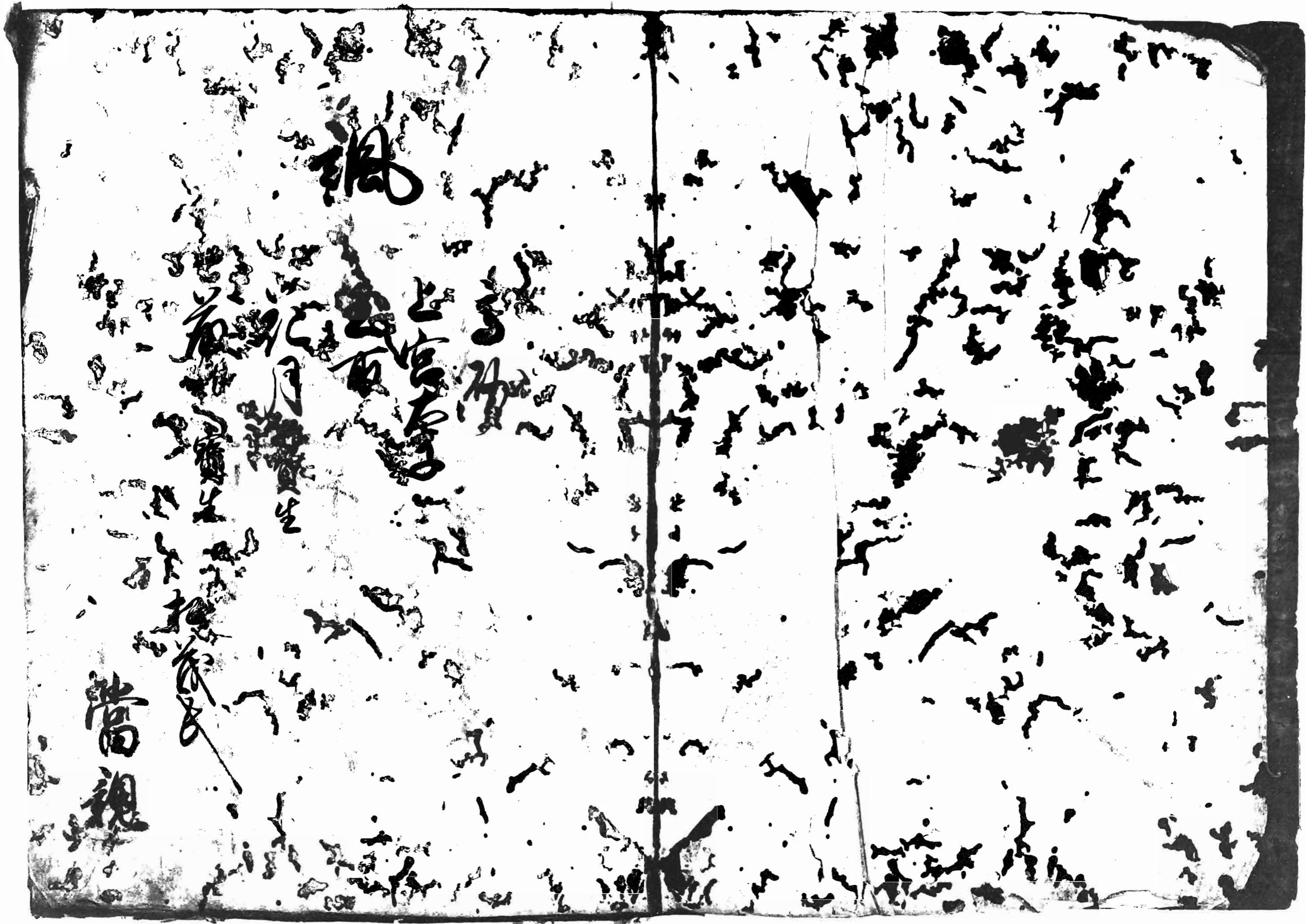
【史料カード】	
SEQ番号	0000410
所蔵元別 分類番号	琉球大学附属図書館所蔵 宮良殿内文庫
史料番号	41
標 題	諷
年 代	
西 曆	
形 態 (数 量)	1冊
作成者	
宛 名	
リール番号	
コマ番号	
注 記 (内 容)	サイズ: 25.0× 18.5 紙質: 楮紙 同治3年12月 書写。當親
※特記事項	



当該史料は劣化損傷が著しく

この部分以降現形保存の状態で撮影する。

虫損の為、合紙を入れていない
部分があります。



紙

此書乃
百卷之
大書也

普觀

日乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

一、乳考
二、乳考
三、乳考
四、乳考
五、乳考
六、乳考
七、乳考
八、乳考
九、乳考
十、乳考

あはれなる松夜来草の
影をよみ思ふ浦乃浪
船路長途の風をよみ思ふ
舟をよみ思ふ浦乃浪
思ひ情懐のよみ思ふ浦乃浪
高所乃松の雲風
大なる尾よの鐘も響るなり

あはれなる松夜来草の
影をよみ思ふ浦乃浪
船路長途の風をよみ思ふ
舟をよみ思ふ浦乃浪
思ひ情懐のよみ思ふ浦乃浪
高所乃松の雲風
大なる尾よの鐘も響るなり

下... 浦風の... 松...

袖... 東陰... 廣...

可... 松...

下... 松...

松... 松...

名... 松...

松...

松...

松...

松...

松...

松...

松...

生乃松と名戸分り 訓 何れも
古今に流るる高砂位の高乃松に
相傳ふ授ふ事 訓 此
耐味の國住者其味うたを
當り人なれ 訓 ありんか
給 訓 ありんか
あり有 訓 ありんか

浦山園 訓 ありんか
事 訓 ありんか
萬里 訓 ありんか
あり 訓 ありんか
事 訓 ありんか
あり 訓 ありんか
あり 訓 ありんか

年久方も住者より通じり
村と松原松原の松原
乃松原とある也
相とありし中より相生の松乃
物語と有りし置いし松乃
音乃人甲一是松乃
松乃あり 松乃あり

百葉集のり乃 俣谷の中

今此松原の松原
松とある也
お松の松原
早の松原
松乃あり

つららむ 長閑 上高 田海

浪静まて 國を治まる時 津風 松

あまの海代 あまのあひひ 相まの

松よりあがたうりまのらるあま

こもごも思ひあはれ ありあまの

あまの君の東より 有稲まの

あまの松の目出た 謂まの

早白

語り 欠草木 心 ひとしき

苑の 時より 入も 陽ま 徳ま

く 南枝 花より まで ひま

とも 此松 其 海ま ころ

花 盛 時 たり ころ 時 ま

下 年 乃 色 松 深 松

あまの 十 人 あり ころ

よりを松のまのまの葉の露の
心は万の松ありて
いささかのこころを較し
が精非精乃其色も
ののちのまのまの風聲水も
物りこのまのまの松の葉の

うとまの松のまのまの葉の
皆和弁のまのまの松の
葉のまのまのまのまのまの
天皇のまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

多しりの曉のそとく霜をよきとも
松の枝乃び雪の同い深きりのまある
陰の月夕のけを落葉の軒をぬ
ま誠あり松乃まの教る勢もして
色も松正木のりりあま世のま
由きるとまの甲も名もま
表事代のためにも相葉の松を

了たさ吉三巻完からとえま松枝の
若木乃音ありりりま其からま業
経るや二上今も行をうむいま是を
言ぬ候の江の相葉乃松の精を
現しありりり地上うま相の石前
乃松の身板を頭りり葉葉らら
あまのま地賀事代スま

厚の浪ヒコまハよりハ ありハのハ山ハ神ハ松ハ
雲ハをハなハもハやハ跡ハ乃ハ雪ハのハ須ハかハりハ
たハまハもハうハらハあハるハ層ハ陰ハのハ 松ハ根ハよハ
よハのハくハ腰ハをハまハんハんハ 中ハ年ハ乃ハ縁ハ
平ハよハまハりハ 梅ハ花ハをハ折ハりハかハりハ
まハまハ二ハ月ハのハ言ハをハたハつハ 上ハ花ハ有ハ花ハ
乃ハ属ハのハ心ハをハくハ月ハ信ハ乃ハ邪ハ様ハ

いハはハ歌ハとハをハなハめハあハらハたハまハりハ 上ハまハ
まハあハくハ乃ハ華ハ始ハのハ巻ハもハ津ハ所ハにハ住ハ
つハえハ乃ハ松ハかハもハもハうハらハあハるハ音ハ海ハ
波ハのハ異ハはハ鏡ハ 上ハ花ハ 社ハ君ハのハ道ハをハ
かハまハ部ハのハ書ハよハゆハくハくハらハんハそハ
還ハ城ハ樂ハ乃ハまハひハ 上ハ花ハ ありハてハ万ハ歳ハのハ
小ハ心ハ夜ハ 上ハ花ハ ありハてハあハらハまハりハ思ハ摩ハとハ

つゝむたまはしるす我々壽福をいふま
多秋君の民をたすく萬歳樂よハ命
をのこす松風歌を乃聲そた
やまき

上官太子

後醍明天皇二十二年正月廿日乃
秋半小御友相の告り金
僧來り給ひ后乃告く宣く我
救世乃預あり則后の淨胎内
下るるなり
后告て宣くせむ胎内を垢穢たす

いひて貴きし清体とやと一語を
又志くも借平重のすく秋の
垢穢といふは唯をむく人
若も人らぬあけり后辞は
可なりととかくもとてはは借
たよよと詠えんは清口に
多きと清し流して曉月
輝き

松風友と破つちあ更の天と明
多き帝ののり夢名悦の義
可き海ふとこれれは照
蘭と波流ゆへは有はは
約成つるもて大坂提河の池の
外より濁る如くは十二月
中山南殿の清麻吹て清し産平安

皇子御誕生存麻^三此皇子^三
中^三上宮太子比^三侍奉

玉取

邪見^三偷盜^三負^三困^三因^三緣^三慈^三悲^三
惻^三隱^三富^三貴^三榮^三華^三此^三心^三
之^三世^三一^三回^三恩^三之^三天^三地^三乃^三恩^三
國^三主^三名^三恩^三流^三生^三の^三恩^三父^三母^三此^三恩^三平^三也^三
重^三老^三は^三是^三父^三母^三の^三恩^三と^三如^三重^三花^三
如^三重^三花^三の^三恩^三父^三母^三は^三是^三の^三恩^三也^三

虞舜の君といはる中郭巨母
養い孝の心好くはゆえ金釜を
掘りて母を埋むる國家父成り
天雷終り身と裂理婦を母と
之にほ雲蛇命と棄るを
其と世善と其昔河新あり
たりの由恩重經と況たまひ

利天のふたは安居の法
此へままといし母摩耶夫人の
存養の為なり君子の五常禮の
五戒まるとして存りの心せよと
ありと云

花月

癸二 風子まうまうと云々

はく成らん 是る筑紫美山の林原

住居を以て増やして秋落し時子と一人

と考へて七歳と申す妻の比河清と云ふ

まひてる程は是と出離の縁と思ふ程の

妻を成く諸国と修河は作

道通

生を奴ら此の身と之れはく憐し
親をれは女はるを此れ我をよ心
とむる子もか千里を所もを
野は山よ海も身我は是誠を
たさく ミテ付 是を花月と申さるる
人我名といとて花月といふは我
と月と常はなりて云ふ及も我は

字をよはざるを花夏は秋を葉

冬は火因果は果と未後ましく
たよ後をといは人是とて 上 諸者
末世はるを成て天下に隠した
花月と我と申也 シテト
今此世と絶をぬるを意と
いふを世也 シテト

か身をほくまぬく^一た^一くき^一に^一ん
う^一ら^一秘^一し^一子^一 驚^一比^一表^一ち^一記^一を
海^一を^一ハ^一久^一と^一大^一長^一力^一と^一あ^一は^一く^一を^一花^一月^一
身^一の^一記^一を^一た^一ち^一の^一記^一を^一
的^一討^一ん^一と^一あ^一く^一花^一糧^一藉^一の^一小
鳥^一と^一討^一た^一今^一考^一か^一異^一國^一若^一
楊^一由^一百^一歩^一と^一柳^一花^一葉^一と^一記^一百^一矢^一と

ふ^一に^一く^一た^一又^一花^一葉^一梢^一の^一葉^一を
射^一た^一と^一思^一ふ^一心^一其^一楊^一由^一を
抄^一た^一ま^一し^一面^一白^一也^一 上^一有^一それ^一を
柳^一花^一葉^一と^一記^一花^一月^一谷^一と^一記^一を
楊^一由^一と^一記^一花^一月^一谷^一と^一記^一を
引^一た^一と^一記^一を^一引^一た^一と^一記^一を
葉^一と^一記^一を^一葉^一と^一記^一を

たゞ少くぬく大に比そはとさうん
夜に社とら川に無く花の本陰に
福の寄てはつひに中やと村さや
思ふ佛にまゝに後教生滅に
破るまゝにこれさあや大慈大悲の
春の氣十思乃雲年しうり白。二十三
身衣秋の月五濁の氷に敷清

相樂寺の坂の上は田村九大同二年に
草創有し大の方今と音羽の願の
志河えの志をさしむらねたは清氷系
たれと波の波さんある村此龍の氷
五色よけて落をれそ社をりや
山入其氷上と尋るよえ志向せん此
岩の洞表川の流るは埋れく公若

青柳表朽木有一木二半三の光四さす
其五多六由七方八下九薰十多十一反十二 法十三の十四類十五不十六
成十七多十八楊柳親音以侍志よ初十九え二十少二十一く
半二十二海二十三志二十四の二十五皆二十六人二十七平二十八と二十九合三十を三十一形三十二を三十三其三十四奇三十五
お三十六を三十七志三十八を三十九も四十て四十一考四十二を四十三し四十四中四十五と四十六以四十七朽木は柳を
み四十八し四十九り五十と五十一あり五十二一五十三様五十四手五十五あり五十六ぬ五十七老五十八本五十九ま六十り六十一
白六十二好六十三小六十四花六十五候六十六も六十七り六十八多六十九く七十り七十一平七十二は七十三朽七十四木七十五に七十六

六一朽二し三る四本五は六花七も八く九や十今十一の十二世十三も十四一十五に十六
申十七分十八 荒十九不二十思二十一儀二十二也二十三是二十四成二十五た二十六月二十七と二十八

く一く二え三と四以五茶六倍七を八し九ら十一十一
い十二た十三に十四ぞ十五く十六公十七を十八く十九あ二十も二十一を二十二も二十三を二十四思二十五は二十六ん二十七ん二十八
我二十九ハ三十元三十一氣三十二盛三十三の三十四志三十五あ三十六たり三十七今三十八も三十九高四十山四十一は四十二
の四十三あ四十四ま四十五し四十六は四十七七四十八川四十九の五十年五十一天五十二物五十三も五十四少五十五く五十六れ五十七て五十八
河五十九山六十く六十一く六十二と六十三た六十四ら六十五が六十六終六十七ら六十八悲六十九事七十を七十一

先づく一又高尾山深き思ふを西寺
讚波なる雲山誇つ玉雪の
清く伯耆よりたえん諸
高のせん母母波の境ある鬼城と
関一を天物よりたえん
京の山と相京ちりねの
は山をた郎坊平野の峯は法郎坊

公高を比叡の大嶽よき心者
社月は横川乃たりねを
日比をよきにのりてを
あまの山と高尾山三上
大峯秋也の嶽富士は二根よたけ
はく雲よ紀州時と皇加祓よね
あまの心なるねはさるね

たつたさうとさうしてはうまき
かき山く願く里くさゆわい
あの僧はひまら紀一さか
此さうさうと捨てた休り
市僧よつ本さうりさく
さく佛道の修行よ出る
行下

夜

山又山然しるく
誠

汝の懐よ
名

いふは都方より出る
表

庭に花は
表

藤原安宅の松
あふ

不戒一見
あふ

すまふ前々今紙巻と見えて
小下 常盤なる松の名たぐい
風^{ニテ}もか^{ニテ}ぬる前の嘆を教
もと古事のごひもいれん
か^{ニテ}つ^{ニテ}ら^{ニテ}ぬ^{ニテ}き^{ニテ}ひ^{ニテ}今^{ニテ}す
へ^{ニテ}事^{ニテ}の^{ニテ}公^{ニテ} 母^{ニテ}方の^{ニテ}事^{ニテ}と^{ニテ}ん
ら^{ニテ}の^{ニテ}事^{ニテ}と^{ニテ}ん 是^{ニテ}八^{ニテ}田^{ニテ}の^{ニテ}浦

とそ前の名新なりぬる人の
り^{ニテ}の^{ニテ}事^{ニテ}と^{ニテ}ん 田^{ニテ}の^{ニテ}浦^{ニテ}
や^{ニテ}江^{ニテ}の^{ニテ}事^{ニテ}と^{ニテ}ん 田^{ニテ}の^{ニテ}浦^{ニテ}
海^{ニテ}を^{ニテ}色^{ニテ}に^{ニテ}出^{ニテ}の^{ニテ}る^{ニテ}も^{ニテ}の^{ニテ}事^{ニテ}と^{ニテ}ん
海^{ニテ}の^{ニテ}事^{ニテ}と^{ニテ}ん 松^{ニテ}の^{ニテ}名^{ニテ}と^{ニテ}ん
海^{ニテ}の^{ニテ}事^{ニテ}と^{ニテ}ん 松^{ニテ}の^{ニテ}名^{ニテ}と^{ニテ}ん
海^{ニテ}の^{ニテ}事^{ニテ}と^{ニテ}ん 松^{ニテ}の^{ニテ}名^{ニテ}と^{ニテ}ん
海^{ニテ}の^{ニテ}事^{ニテ}と^{ニテ}ん 松^{ニテ}の^{ニテ}名^{ニテ}と^{ニテ}ん

冷しく古なる
中く名代の早松の名なき
と種せしハ公もあしと云
茶 早川さく 漢へさく 翁海の
先 田子の浦そそく人 白く 翁
紙く ざうて げん 見ぬ人
の 為と しみ 至 此 知 紙 子 かく

がら 紙 終 六 う 終 じ や 翁
や ち 入 八 君 あり て 誰 よ う ん せん
梅 乃 其 名 色 紙 も 香 也 も 志 乃 人
の 知 ら じ とも しみ も 埋 ら じ かく
内 室 乃 終 り とも 白 末 じ 方 水 翁
の あり とも 紙 終 水 乃 人 八 じ
や せん 紙 終 誰 とも 白 末 翁 後の

着る現を子ほちこれ記人と
ちし智身然記人と之と
信の類ひ流よあく
丁の入雲れ 地 松の
下なる女れ 地 精なるを夕
なるまより流や田子の浦
になひく松の甲よよか

うせにたりやく
東の月の光りけりを玉の
より又実めぬくねき帯も
法のなるそく花の跡も松
月の色わきそく破れ後
の身やさほそ
傳りきしをせにぢらるる

何と云ふもなまじしそめん
月夜もあも文とて月
移るゑさく白く雪の陰り
おんくもひしけり花乃
移るも昔中しなれ
花ありあはら伝果のほたの
にむくふる花の書後と成る

是と云れあそるなり
行有るも去るも二夜と
美哉かり清事何のあはれ
風んいさう代男の交れ
のそとてあもすう守
席張らさんとあひたり
実やなりねと綺麗を

信佛のまのいんゑんハ
何のたれ
るひハふにり首のともくたりく
と被への外あるはまもつり
はのちれ園くくもこの花を
けや海士のわりものまよと
成仏言に有被海海まは

の道ろんく
送らに舟車試幼
用ひはと只所言
よどろたれたなり
の庭にあり花の色
内に着るの衣
の面にさしける月の表

こはるの井の白の記着のくち敷
柔ハ又花よも 北 きのこの浦
せも 北 花のに 北 しく 北 音
名下 身津凡吹らと
多々那 名下 身津凡吹らと
破の松の夜ふり 名下 身津凡吹らと
田子の浦着浪のよる 名下 身津凡吹らと
いづつよ 名下 身津凡吹らと

花の舞ちりり 名下 身津凡吹らと
橘よ袖ふり 名下 身津凡吹らと
吹花多花 名下 身津凡吹らと
秋ありと夕子の月 名下 身津凡吹らと
古風よ小春 名下 身津凡吹らと
たりて 名下 身津凡吹らと
花に 名下 身津凡吹らと

三ノ上ノヨリ
 ヤラハ神にんは
 とりのなれは
 行かくら花
 波のうへ
 とまの
 有角の
 袖紫
 地

三ノ上ノヨリ
 マヤノ
 シノ上
 神の
 松
 花
 柳
 聲

ニヒヤコトクニ
 ヤラセバコトクニ
 とりなりし海に高き
 行かくりり花が帰す
 海の人と花あまたさ
 と雲の飛んぞとさ
 有月の海にしろめ
 袖業身と袂を叶
 ゑ家



の白ひも凍もとりり紙の透風
田子の浦浪おちくし吹を
心もなり初蝶の暮は雲の
くも衣明る積雲に光り
戸かぬ山の暮りけり
息の初より暮あやゆらん

明治二年

用紙書落し敷

清山共人

南親

